XB60-299
0007952344

博物館藏版

教草 第十六
烟草一覧

凡そ日用に供ずる衣食の如き人皆之を衣とし之を食して何ものたるを知らざるものあるぞ其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の發明なく國產を繁殖せしめず各其業に就く事を知らず故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむることは他日脩產の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に乗じ各種職業の教草を編成せしめ画図を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まで昨八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し殊に従前の謬誤を正し遺漏を補ふしかと雖も其圖の舊版を再刻する者の如き鮮明ならざるところあり看者之を恕せよ且我國產の多き此一部の盡す所に非ず此餘の如きは以て他日に譲る

明治九年二月　田中芳男記

第一 稲米 第二 糖製 第三 養蚕 第四 生糸 第五 樟虫
第六 野蚕 第七 葛布 第八 苧麻 第九 草綿 第十 織緯草木
第十一 索麪 第十二 葛粉 第十三 藍 第十四 青花紙 第十五 製茶
第十六 烟草 第十七 漆 第十八 蒔繪 第十九 蠟 第廿 白扮
第廿一 疊表 第廿二 香蕈 第廿三 製紙 第廿四 蜂蜜 第廿五 油
第廿六 臙脂 第廿七 澱粉上 第廿八 澱粉下 第廿九 裮偎 第卅 豆腐

版權所有

教草 第十六　烟草一覧

淡巴菰ハ蜜語の音譯にして支那にて之を烟草と云ひ此草原と南アメリカ産の草にしてタバコト云ハ其産地の名を負ハしものなり始て發見せしハ西洋の紀元一千五百六十一年にして今を距ること三百十二年なり我邦に傳へしハ慶長十年乙巳の歳にして今より二百四十五年前ホルトカル人齎来りて肥前長崎に植るをはじめとし爾来次第に傳播し今ハ嗜まざるの人少く培養せざるの國なしと雖ども地味の適不適に従て各地の名産其品位一ならず

此草暖地に於てハ冬月枯萎せずと雖ども大抵年々種子を収めて早春に下種するを常とす萌生の後春三月に至れバ其苗稍成長して五六寸に至り葉の大さ漸く錢の如し六月中ハ直立して長さ六尺に過ぐ茎ハ圓大にして木幹の如く葉形椿圓にして末尖り互生して柄短く葉面ちゞみて茎を抱き一葉の大さ尺に過ぐ茎葉ともに細軟の毛茸あり秋月に至り梢頭に花梗を分ちて許多の花を開く漏斗状大さ寸許淡紅紫色愛観すべし花後椿圓の実を結ぶ内に三房ありて淡赭色の細小種子無数を貯ふ培養せる地によりて葉形一様ならず或ハ圓潤或ハ狭尖或ハ厚長等あり大隅薩摩伊豫阿波の産ハ圓潤を上とし上野攝津の産ハ小にして長き等なり

培養の法ハ各地同じからず大隅薩摩日向伊豫上総等にてハ秋八九月中種子を下し春三月に至り移し植ゑ他の國にてハ二月種を下して三月に移し植ゑ又正月に下種するの地もあり是地方寒暖に因りて異なるものにして自然に慣習となりしなり茲に其概畧を擧ぐ　阿波の國にて培養する法ハ春正月二月の間向陽の地を耕耘して種を下して廐肥の細かなるを切るを振掛け置バ凡二十日を經て發生せバ茲に於て畝ひろく廐肥を去り糞水の稀薄なるを屢灌ぎ培ふ毎に苗の蘩密せるを抜去る之を間曳と云ふ三月に至り苗の大なるを抜去りて豫め用意せる畝へ移し植ゑ毎畝の間凡二尺にして苗ハ凡八寸を隔て植ゑ但し其疎密ハ地の肥瘠に従て同じからず　苗を植るハ三月より六月上旬迄を限りとし皆植て後水糞等分なるを灌ぎ後七日許を經て油粕の細挫せるを振掛ること三回都合二十一日の後麦稈藁芒の類を以て畝一面に布く之を苅肥といふ是ハ雨露の為に土砂の葉を穢すを防ぐなり此草性辛辣にして収採の後ハ蟲蠹の患なく又其煎汁を以て他の蟲を防ぐほどのものなりと雖ども成長の時ハ却て小蟲の嗜むものなれバ植てより葉を収むる迄毎朝蟲を除き去ることを怠るべからず然らざれバ忽ち潰爛の葉となり網状となりしむるものなり

成長の期に至れバ梢頭に花を着け種子を収めんと欲するものハ開花成実せしむと雖ども其他ハ花と枝ハ悉く摘去るべし然らざれバ葉の香味倶に減失せり

大隅の國府ハ淡巴菰培養に最精しく其地の住士山内某の説に云ふ養料ハ油粕を以て第一とし故に油粕を多くして人馬の糞溺を用ること少なけれバ葉形小なりと雖ども香味佳美なり之に反すれバ葉至大にして香味大に劣れり上等の地に下等の品を生ずるハ養料の適否に在るのミ

又或人の曰く凡草木ハ養料を根に施すを常とし烟草に至てハ根に施すの外茎上より施すことあり即ち茎の二尺半程に成長せるとき油粕少許を捻して遍く振掛るときハ其成長殊に速なりとぞ

採収の法も各地また同じからず今茲に阿波の國採収の法を擧ぐ

六月に至り日を追ひ葉色淡黄となるとき根に近き葉を二三枚摘採る之を元葉といふ中品とす夫より十三四日を過ぎて追々に二葉を摘採る之を中葉といふ上品なり后り茎枝を雑ぜて折採り陰乾するものを枝折淡巴菰といふ下品とす

摘採りたる葉の後先を揃へて土間に積置き上に薦を被ふこと一両日黄色に変ずるを度として烟の通ふ所に縄を曳き二三葉づゝ挿む約一丈三尺の縄に一斤を挿むを常とす斯して十四五日稍乾けるを太陽に曝乾すること二三日復た暴露すること二夜其浸潤を待て一葉づゝ展べて茎を束ね二三日壓板を掛けて後窖に貯へ置くを佳とす

淡巴菰ハいづれの國も培養せざる所なし就中産出最多く且世に著しきものを以て左に録せ其品類の差等ハ人毎の好尚に因ることなれバ確乎と定め難しと雖ども今世に稱せらるゝものを以て三等に分つこと左の表のごとし

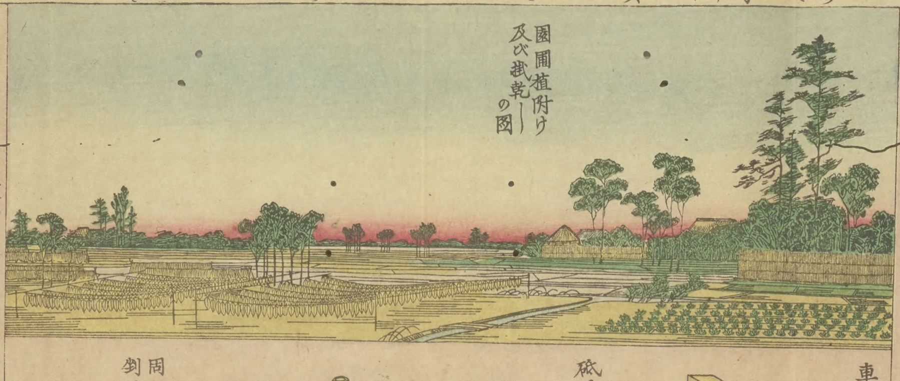
等級	國	産地
一等	大隅	國府
	上野	舘
	薩摩	出水　指宿
	攝津	右津畠
	武蔵	秩父
	丹波	山本
	上総	小系
二等	相模	秦野
	信濃	清内路　木曽
	甲斐	龍王
	長門	下之関
	肥前	長崎　島原
	常陸	赤土　水戸
	下野	天下野　大山田
三等	阿波	
	但馬	
	備中	
	近江	中野
	丹後	
	磐城	松川　三春
	岩代	會津

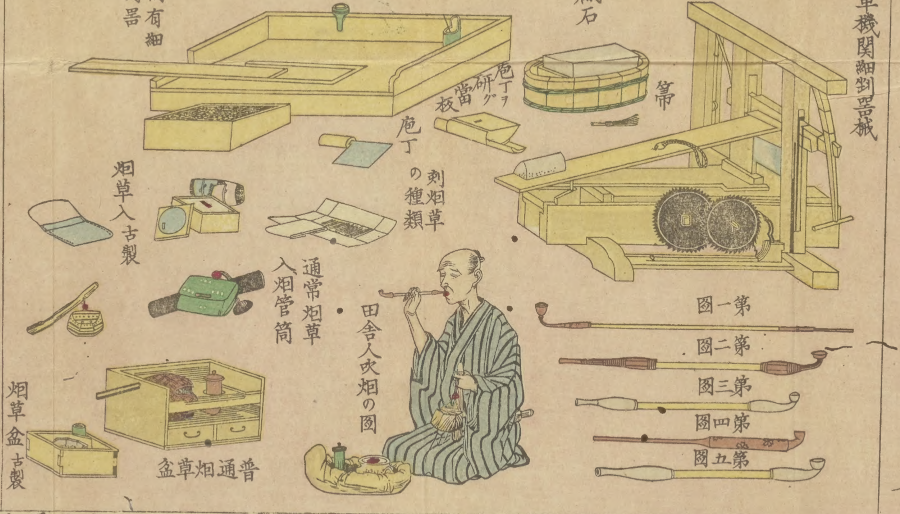
出入表

	輸入	輸出
東京		
西京	同	同
大阪	同	同

外國輸出

	斤量	價
神奈川		
神戸	同	同
長崎	同	同





我國にてハ葉を細刻して絲の如くし烟管に装し火を點じて烟を含むを常とす近年外國の製を摸して巻き淡巴菰を造ると雖ども未其製粗にして偏く人の嗜好に應ぜず

葉を細刻する固有の法ハ葉に着たる砂を箒にて拂ひ茎を去り薄板を以て適宜に巻たるを央より切り其口を揃へ重ねて木口板に置き押板を以て静に壓し切るに従ひ押板徐々退歩して毛髮状を成せ此壓せしと切るとの力平均して其纎細を成すことと工人の巧拙に因りて各精粗あり俗に之を手切と云ふ

機関を以てするものあり其器械の全部ハ堅質の木を以てし車輪及び肝要なる部分ハ鐵を以てす今より凡六十年許前東京芝田町に政右衛門と云へる工匠あり創て此器械を造れり是ハ大阪或ハ西京にて錦を織るに用ゆる平金線を剪る器械を摸して造りたるものにして當今に至りてハ次第に精工を加へて人力を省くの良器となれり

同じ器械の一種に車輪を用ひず螺旋機関を内部に設けて使用すること前に記したるものと異ならず是ハ今より八年程前に東京の芳町に清次郎と云へる工匠ありて發明せしと云ふ全形聊かなれバ輕便にして用ゐるもの亦多し

又一法あり累たる葉數十百を器械にて堅く搾り恰も木板の如くならしめ鉋を以て削り製す是下等の製にして上等のものをかくの如く製すれバ香味変失して進美ならず俗に之を鉋切と云ふ

淡巴菰を含むに用る器具の形状ハ工人の意匠と用る人の好みに因り一様ならず且古今の別あり今茲に擧る第一及第二図ハ最創造のものにして精しく大概茂質が撰める蔫録に見へたり第三図より第五図に至るものハ古今専ら用る所のものなり其他の器具ハ總て図上に鮮なれバ茲に贅せず

外國に於てハ刻たるを紙に包ミ又烟管へ装して烟を含むありと雖ども多くハ巻烟草を用るを常とす外に嗅烟と云ふあり是嗅ぐのミにして火を用る事なし烟火を禁ずる地に於て用るのミ

上に録せしものハ只其概畧なり精くハ別に纂輯せる書あり就て見るべし

明治五年冬

南部陳編撰

狩野良信図畫

博物局

B 85992

東京大学総合図書館